

# 屏風の聖徳太子伝説

(付 太子道をたずねる集い)

三宅町屏風の太子道には、聖徳太子が斑鳩宮から明日香の小墾田宮へ通われた時の伝承が残されている。杵築神社の「屏風の清水」、あるいは白山神社の「駒つなぎの柳」や「太子腰掛石」などがそれで、また、「屏風」という付近の地名は、村人が太子をもてなす際に屏風をたてて風を防ぎ、接待したことから名付けられたといわれている。これらの伝承は、鎌倉時代の僧顕真が著した「聖徳太子伝私記」に伝えられている。

**屏風の地名由来** 或る書に云ふ。太子鷗宮（いかるがのみや）より毎日、橘寺の推古天皇の宮に詣らしめ給ふ。……又其の日中の供御者（昼食）をば屏風に於いて進めしむ。屏風を立てるに依りて、当時寺を立て、屏風寺を立て、屏風寺と名づく。云々……（聖徳太子伝私記）

**屏風の清水由来** 太子は、屏風村をお通りの時、堤でご休憩された。お供の調子磨が飲み水を探したが、見つからなかった。太子は従者の持っていた弓で、自ら地を打って掘られたところ、冷水がこんこんと湧き出た……。

また、屏風の杵築神社は、出雲大社（杵築大社）系の神社で須佐男命を祀る。拝殿には民俗学的資料として貴重な「おかげ踊り」の絵馬が奉納されており、この絵馬は県の有形民俗文化財の指定を受けている。また拝殿には「聖徳太子接待」の絵馬も奉納されている。



## 太子道をたずねる集い

毎年、2月と1月に法隆寺の主催で太子道を歩く催しがあり、参加記念に貰うスタンプ帳には、その由来と趣旨が書いてあります。

『聖徳太子が愛馬黒駒にまたがり、侍者である調子磨を従えて、斑鳩宮から飛鳥の小墾田宮へ通われたと伝える道を「太子道」または「須知迦部道」（筋違道）と呼んでいます。それは飛鳥から斑鳩を結ぶ最短距離の道であったのでしょう。

一方、斑鳩宮で薨去された太子のご遺体は、母、間人皇后が葬られている河内磯長の御廟へと運ばれたと伝えています。その道も同じように「太子道」と呼んでいるのです。これらの太子道は、千四百年ものあいだ太子の遺徳を偲ぶ多くの人々によって大切に護られ、語り継がれてきました。

法隆寺では聖徳太子のご命日である2月22日を「太子の日」として、太子を偲び、毎年11月22日と2月22日に「太子道をたずねる集い」を催すことにいたしました。太子像と共に太子の時代に思いを馳せつつ、各コースをお歩き頂くようお願い致します』

僕は両方のルートに参加しましたが、今回ポコアの例会で歩く三宅町の太子道は飛鳥へのルートの一部ですので、それを紹介しましょう。

法隆寺から飛鳥の橘寺まで約24キロ、途中、田原本の多神社から橿原の今井町まではバスで移動しますので約20キロの道を歩きます。参加者は約150人、他に多数の法隆寺のお坊さんとボランティアスタッフが同行、それと輿に乗った太子像を担いだ集団が同行します。歴史散歩ではありません。いくつかのポイントで説明や挨拶がありますが、その間は只、歩きます。風景に見とれていると置いていかれてしまいます。それだけにゴールした時は何ともいえない達成感があって、毎回参加するという人も多いようです。

朝8時30分に法隆寺南大門を出発、すぐに富雄川の岸の「上宮遺跡」に到着、ここで遺跡の説明を聞いた後、業平橋を渡って安堵町へ、安堵町役場、飽波神社を経て大和川を渡り、油掛地蔵から寺川に出て、11時10分に三宅町の屏風白山神社に着いて、ここで昼食になります。

三宅町屏風は聖徳太子が、昼食のために村人の接待を受けたところですが、その故事通り、ここでは万葉衣装の三宅町長の挨拶があり、同じく万葉衣装のコーラス隊の歌があり、豚汁の接待があったりします。

1時間の昼食タイムの後、田原本の多神社までの1時間半、古い集落と新興住宅をグルグル繋いでいきます。この太子道を歩く会は出来るだけ昔の道を忠実に行くためにこうなのでしょう。多神社でまた挨拶と説明があり、ここからはバスで橿原の今井町に移動、今井町からは明日香川の岸を甘樫丘公園まで1時間半、そろそろ足が痛くなって……という声を聞きながら歩きます。4時15分に橘寺へ到着、最後に橘寺のご住職のお話を聞いて、太子を偲ぶ一日が終りになります。

